

活動報告

台湾介護実態視察の活動報告

—公的機関と介護施設と福祉機器政策—

関口昌利、菊池小百合、廣橋雅子
(佐久大学信州短期大学部)

Taiwanese long-term care environment report

—Government policy and long-term care facility and auxiliary equipment—

Masatoshi Sekiguchi, Sayuri Kikuchi, Masako Hirohashi
(Department of Shinshu Junior College at Saku University)

要旨: 佐久大学信州短期大学部では、2016年に続き2017年3月台湾台北市を訪れ、主に高齢者施設及び福祉機器関連研究所、販売企業等の視察を行った。今回の目的は台湾の介護上の課題と対策を知る事により、グローバルな視点で日本の介護及び介護教育について示唆を得る事である。視察を通し、台湾における早急の課題といえる少子高齢化社会の到来、それに伴う認知症者の増加に対する政策及びケア、高齢者・障がい者に対する様々な福祉機器の開発等の状況を知ることが出来た。今回得られた知見を学内授業に活用するのみでなく、公開講座等の開催により、地域に向け介護環境改善に資することが出来るよう働きかけていきたい。

キーワード: 台湾、介護、福祉機器

I. はじめに

海外旅行として人気を集める台湾は、東京から約3時間のフライトで行けるにぎやかな観光地である。熱帯気候のため、年間平均気温が25度から30度と高く、夏は日中外で歩いている人をあまり見かけない。その一方で、夜になると町中のライトがつき始め、夜市が並び、食べ物屋台や土産店が多くの人々で賑わうのが特徴的である。また台湾は1890年代後期日本統治の背景を持ち、親日国としても知られ、現在も日本語を話す高齢者が少ない。

佐久大学信州短期大学部では2015年より介護研修として、介護に興味のある学生や社会人を台湾から受け入れたことを始まりに、2016年から、本学部の教員が、台湾へ介護視察を目的に年に一度訪れている。

二回目となる今回の視察では、台湾介護の現状（高齢者の入居施設と施設ケア、福祉機器等）を理解するために、政府機関・施設・補助器具について視察・調査を行った。

II. 視察内容と目的

1. 計画と日程

1) 日程: 2017年3月3日～8日 計5泊6日

佐久大学信州短期大学部教員3名で台湾を訪れた。スケジュールは表1のとおりである。

表1. 視察スケジュール

日付	視察先
1日目(3月4日)	清福養老院 視察交流 台北市内散策
2日目(3月5日)	台湾の歴史(九份・金鉱の街)
3日目(3月6日)	1. 衛福部国民健康署 視察 2. 台北市中山健康服務中心 視察 3. 國立陽明大學 ICF 暨輔助科技研究中心
4日目(3月7日)	1. 中山区高齢者住宅・ニン市長ケアセンター 2. 必翔銀髮事業股份有限公司

2) 視察目的

介護保険制度がまだ導入されていない台湾では、基本的に利用者自己負担による介護サービスが行われている。

症状や身体状況によって一部の補助金制度はあるものの、個人負担額は生活費に対して支出割合が大きいのが特徴である。介護保険制度の導入を検討しているが、24 時間の住み込み外国人介護者を自宅で雇えることや、医療費の財源の不足などの理由から、台湾政府はまだ導入時期を明確にしていない。

今回は以下の3つを目的に、台北市にある高齢者ケアに関わる機関や施設の視察を行った。

- ①有料老人ホームにおける施設ケア・運営方法の理解
- ②公的部門の健康促進及び介護支援とその運営
- ③台湾の補助器具の状況及び制度についての調査

2. 介護施設視察内容

1) 清福養老院

最初の視察は、台北市に隣接している新北市三峡区にある清福養老院である。建設会社が運営母体の地下1階、地上9階建ての全816床からなる大規模有料老人ホームである。謝主任の説明によると、地下は駐車場、1階部分は公共スペースで診療所（清福醫院）、理容院、地域住民も使用可能なホール・会議室などが併設されており、2階から9階が居住スペースになっている。

台湾では、50床以上の施設は財団法人でないで運営できないため、政府に頼らず民間の力のみで経営するには独自のシステムの構築が必要となる。当該施設においては、全体の816床を各48床17施設に分け1フロアに3施設ずつ配置している。その内16施設は4人部屋（多床室）が12部屋の有料老人ホームで、残り1施設はナーシングホーム（護理之家：日本の老健とグループホームの機能が一体となった複合型施設）となっている。現在、定員の充足率は90%以上であるが、様々な情報手段（フェイスブックの開設など）を活用して広報活動



図2. 地下1階～地上9階までの案内表示

を行っている。施設見学をして入居を決める人は見学者のうちの60～70%程度だという。入居費用はすべて自費で賄わなければならないため、入居者獲得においてはセールスポイントが重要となる。説明されたポイントは、①安全設計②快適な居住空間③バリアフリー設計④衛生管理の行き届いた環境、以上の4つである。いずれも運営母体が建設会社であることのメリットを最大限に強調していた。

地域のボランティア団体・グループと連携してアクテ



図1. 清福養老院外観



図3. 説明と案内をしていただいた謝主任



図4. 居室は全て4人部屋（トイレ・シャワー室付）



図5. 居室内のシャワールーム兼洗面所



図6. ボランティアによるアクティビティケア

イビティケアに重点をおいていること、公共スペースを地域に開放して入居者との交流を図っている点もこの施設の特長の1つである。

また入居者の約20%を占める寝たきり期の利用者と職員配置の関係の説明がなされた。約350人の介護職員

が勤務しているが、台湾人介護スタッフと外国人介護スタッフの比率は、ほぼ1:1であるという。台湾においても、介護人材の確保は困難な状況で、福祉を学ぶ学生のほとんどの卒業後の進路は介護職ではなく、相談援助の専門職であるソーシャルワーカーを目指すという。外国人労働者の確保については、フィリピン等南アジアの現地仲介業者と提携し、スカイプ面接により採用を決め、全寮制で最低賃金により雇用をしている。現場責任者である陳意千院長の話によると、介護ヘルパーとしての業務は、汚い仕事というイメージが強く、台湾国内では外国人がする仕事という区別ができてしまっている。90時間のヘルパー研修制度があるが、台湾にはヘルパー協会という職能団体がなく、ベテランヘルパーを昇進昇級させたくとも、政府に評価制度システムがない現状では経営面に反映できないので、労働環境の改善につながらない。半面、規則に縛られないことを逆手にとり、柔軟性をもって運営できるメリットがある。



図7. 陳意千院長とともに

認知症または認知症と疑われる利用者は、施設全体の4分の1、約200人にも及んでいる。家庭的な雰囲気、きめ細かな認知症ケアを提供することは困難なため、ユニットケアへの切り替えは現状では不可能であるという。職員研修の一環として、認知症ケアの講習会を実施しても、認知症ケアの講師と受講職員との間には距離感があり、特に外国人介護スタッフは、難しい内容を教えても理解できず、結局利用者に対するケアに還元できないのが実情である。しかしながら、間違った理解による、間違ったケアが継続されることを防ぐ目的で、医師、看護師、薬剤師が常駐する診療所を施設内に開設し、利用者本人、家族に安心感を与え、生活に不安を感じさせないように配慮している。

居室ベッドには、水道水で丸洗いが可能な合成樹脂製



図 8. 丸洗いでできるプラスチック樹脂製マット



図 11. 視察当日の入居者の昼食献立



図 9. 面会に訪れた孫と一緒に遊べる憩いの広場



図 10. 入居者用のシアタールーム

の網状マットレスが使用されている（台湾メーカーとの業務提携商品）。軽量で通気性がよく、体圧分散に優れているので褥瘡予防の効果が期待できる。

2) 中山区老人住宅・認知症ケアセンター

正式名称「台北市中山老人住宅兼服務中心」は、台北市政府社会局が財団法人健順療養センターに委託し、管

理運営している施設である。1階は老人サービスセンターとして、地域住民等を対象とした認知症教育及び介護予防のための運動・各種イベントを実施している。2階はデイケアサービスセンター・入居施設として、50歳以上の認知症者及び身体障害手帳保有者、支援が必要な高齢者の利用施設である。さらに3階から6階は健康高齢者が入居する老人住宅と多彩なサービスを提供している。

特記すべきは、今後認知症高齢者の増加が見込まれる台湾において、日本ですでに取り組みが行われている認知症高齢者に対する環境支援の視点が、各所に導入されている点である。



図 12. 建物外観

1階の老人サービスセンターでは、回想法を利用し台湾の昔の町並みを再現したコーナーが設置されている。入居者のみでなく地域住民も訪れることができることから、認知症ケアに対する回想法を用いた支援及び教育に



図 13. 昔の居室の様子



図 14. 回想法コーナー

寄与すると思われる。

さらに興味深い内容として、老人住宅入居者のみでなく、施設職員・入居者家族・地域住民に対する健康教室が実施されている。メニューはエアロビクス・カラオケ・健康講座等である。これらは認知症予防として今後の台湾にとって有意義な取り組みと言え、日本が目指している地域住民に開かれた施設としても、注目すべき点と考える。

2階認知症高齢者入居棟では、入居者の不安の軽減を目的とした様々な工夫が行われている。その一例を挙げると、帰宅願望により出口を探す入居者が扉を開けた先には、仏像の絵が張られ、参拝できる空間となっている。それにより目的が参拝となり、帰宅願望を軽減する事ができる。これは台湾の宗教文化を有効に活用した工夫と言える。

認知症高齢者に対する環境支援は、「認知症高齢者のための環境支援の指針日本版3 (Professional Environmental Assessment Protocol)」(以下 PEAP とする) として、日



図 15. 扉の前に書かれた仏像の絵

本の高齢者施設で活用され、有効性が検証されている。施設管理者からは PEAP の活用について明確な返答は得られなかったが、筆者の感想として環境支援の多くに PEAP の視点が活用されていると感じた。

認知症ケアに対する職員教育も充実しており、今後台湾の認知症ケアにおいてモデルとなる施設と考える。

3. 政府機関視察内容

台北市の公的機関として、中山区にある健康サービスセンターと台湾の行政機関・衛生福利部の国民健康署の二箇所を視察した。

1) 台北市中山区健康サービスセンター

到着すると、1階から会議室がある7階まで、一路センター職員の盛大な拍手の出迎えに驚いた。また正門から、会議室までいたるところに歓迎ポスターや電光掲示板の歓迎に嬉しさを感じた。

台北市政府衛生局の管轄下にある中山区健康サービスセンターは、センター長(主任)の下、4つの組織で成り立つ。「個案管理組」では、健康管理、弱者へのサービス、保健衛生管理、中高齢予防や個別住民の管理を行い、「健康促進口」では、学校などでの衛生管理、婦女幼児衛生、癌防止対策、生命統計、地域健康促進、救急



図 16. 韓主任と中山健康促進協会郭理事長と

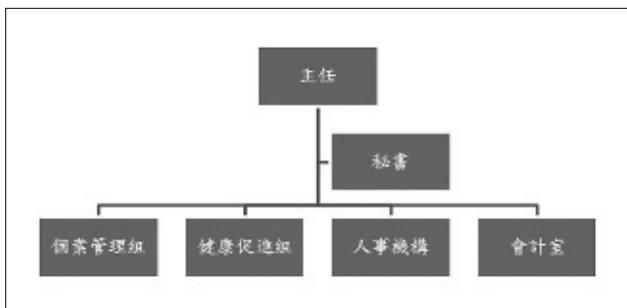


図 17. 中山区健康サービスセンター組織図

技能訓練や衛生教育および広報活動を主に取り扱っている。

中山区は台北市 12 区のなかで、6 番目に大きな面積を有し、人口は 23 万 1,164 人（第 6 位）である。老化指数¹⁾は台北市全土で 105.76% に対し、120.99% と高く、台北市 12 区の中で第 3 位であった。市内に総合病院は 3 院あり、診療所は 471 軒、薬局 97 店を有する。中山区は台北市の中核地域として、有名ホテルやデパート、免税店、博物館などが集まるにぎやかな場所である。

最も住民に身近な健康管理を行っているセンターであり、児童医療補助証や台北カードのポイント交換、予防接種証明証の発行、血圧測定、体脂肪測定、三高測定²⁾などのサービスを提供している。

中山区の独居老人数は台北市内 12 区のうち 4 番目に多く、2015 年から医療団体と社会局、衛生局及び警察局と合同プロジェクトを立ち上げ、訪問サービスを行っている。その効果が認められ、現在は訪問診療による統合的なケアを提供し、地域の資源を活用した展開を進めている。

さらに地域住民ボランティアによる、家事手伝い、訪問配膳、身体ケア、付き添い、電話訪問などの提供が行

われており、多くの独居老人の生活の助けとなっている。

さまざまな活動を通して利用者へのサービス提供をしている。写真のように健康サービスセンターでは、日本でも普及している家庭用ゲーム機を利用した運動やダンスを住民に提供している。一般家庭で用いられているゲーム機器が、台湾の公的機関で取り入れられているのも印象的だった。

また、台湾では日本のパスモカードやスイカカードのような交通機関で使用できるデポジットタイプの図 18 の悠遊カードがあり、多種多様な機能が付加されている。そのなかでも、健康に結びつけるための図 19 にある「台北カード」の特徴を紹介したい。

健康促進を目的とし、台北市政府が住民に提供した「台北カード」の利用方法とメリットは以下の通りである。

①基になる交通機関などで使用する「悠遊カード」を利用し、個人の台北カードを作成し、市が行う定期健診に参加すると台北カードにポイントがたまる仕組みになっている。たまったポイントは悠遊カードと同じように使用することができる。



図 18. 悠遊カード



図 19. 台北カード

②台北カードで検診を受けることによって、個人の健康管理ができ、血圧や基本的な情報を健康クラウドに記録をすることができる。

③幼児医療補助記録の閲覧ができる。

など機能は拡大中だが、何よりも行政が住民と一丸となってこのカードの利用率を上げていることが素晴らしいと思えた。効果の一例をあげると、開始後2014年の大腸がん検査者数は前年比20%増、乳がんは16%増となったとの事であった。住民の健康促進活動への参加が意欲的になったことがこのことから理解することができた。

2) 衛生福利部国民健康署

国民健康署は全国民を対象に健康活動を行う国の公的部門である。胎児、幼児、児童、青少年、成人、老年、それぞれの国民に適した健康管理、健康促進や予防活動を促進している重要な機関である。

WHOは2002年より高齢化社会に適した指針や指標を報告してきた。そしてその指針に従い、台湾も「高齢者フレンドリー健康環境」の構築をめざし、そのサービスについて各地域でさまざまな高齢者を対象にした健康促進ネットワークを広げている。医療機関や衛生所、そして地域のサポート拠点の新設やサービス、活動の提供をしている。

国民健康署から提示された資料によると、全国で行われた高齢者健康促進活動の2012年における男女参加人数はそれぞれ67,719人と115,762人に対し、2015年は81,642人と134,230人まで増加していることから、活動への意識は広まっているようにみえた。

健康署では、要介護前的高齢者を対象にした活動をメインに行っている。生活機能(IADL)に問題が無く虚弱度(Pre-frailty)がSOF(+1)と判断された場合、介護予防と健康維持や健康促進に関わる全ての活動を提供しその効果なども検証しているようだった。

また要介護者となった場合、衛生福利部の「護理及健康照護司」という看護とケアをメインに扱う行政機関へ管理データを移行し、要介護者のサービス管理を担う仕組みになっていることも説明をうけた。

署長の王英偉医師は家庭医学の専門医でもあり、自ら教育にも携わるまさに最先端研究をしている医師でもあった。我々が訪問した際も、大学と共同で開発した冊子をいただいた。この冊子は高齢者の転倒予防を図解で分かりやすく説明している。一冊20台湾ドルで販売されており、病院でも取り扱っているとのことだった。

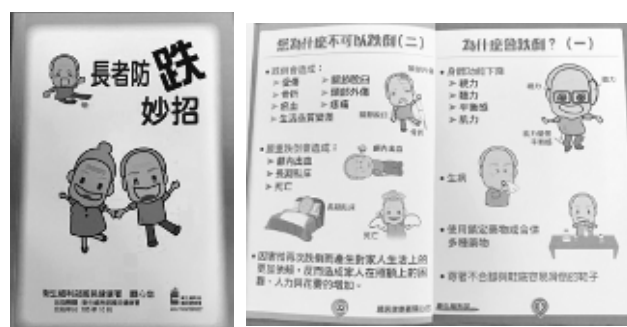


図 20. 高齢者転倒予防冊子

4. 補助器具関連視察内容

1) 国立陽明大学 ICF 暨補助科技研究中心

国立陽明大学は医師・歯科医師・看護師等医療人材の育成を目的とした、台湾で最初の医療系大学である。その中にある「ICF 暨補助科技研究中心 (ICF 学芸補助技術研究センター)」は、国立陽明大学リハビリ研究所内にあり、台湾国内25か所ある福祉機器に関するサービスセンターの中心的役割を担っている。その内容は、台湾国内で利用・開発される機器に対する品質評価、福祉機器の普及活動、国内で利用される福祉機器約300種類に対するICF(International Classification of Functioning, disability and Health: 国際生活機能分類)を用いたアセスメント表の開発及び利用等多岐にわたる。

センター内には常時各種福祉機器が展示され、希望者が実際に体験し評価することが出来る。

2017年には、台湾の衛生福利部が国立陽明大学ICF 補助科技研究中心へ委託し、福祉機器を広める目的で福祉機器展を開催している。



図 21. 各種車いすが並んでいる



図 23. 必翔銀髪事業（株）ショウルーム



図 22. センター内の様子



図 24. 主力商品の 4 輪電動車いす

現在台湾の高齢化率は 12.51% であるが、今後急激に進行し、2025 年には 21% 以上になると推測されている。さらに日本同様出生数の減少が見込まれており、介護人材の不足及び介護負担の軽減に対して、今後福祉機器の活用は重点課題になると推察される。

2) 民間企業視察：必翔銀髪事業株式会社

必翔銀髪事業株式会社は、台北市内から約 60km 南西に位置する新竹縣新豐郷にあり、台湾の福祉用具製造販売の現場を直接見学したいという目的で訪問した。1983 年に設立され、当初は電動車いすを中心に製造販売していたが、2001 年に世界初の 4 輪電動車いすを発表し、米国、ドイツ、イギリス、韓国など世界各国で発明特許が認められている。台湾国内においては、台北市、桃園市、新竹市、高雄市の 4 か所に販売拠点を構えている。

販売方法としては、施設へ直接売り込み、国内の既存業者と業務提携をして販売網を拡大したほか、何より特徴的なのは、インターネットショッピングで顧客を増やしてきたことである。商品コードをユーザーが読み取るだけで、各種補助器具生活用品を購入でき、また、4 輪

電動車いすを「電動カート」という品目でレンタルできるシステムを考案するなど、顧客ニーズを探して、他社には無いモノづくりを続け、競合相手との差別化を図り販売実績を伸ばしている。

説明をうけ、福祉用具の展示ショウルームを視察した際、我々が足を止めた商品は、リクライニング式車いすと杖であった。車いすは、福祉用具としては洗練された色づかいで、日本製はアルミ（スチール）フレームがほとんどでシルバー 1 色であるが、乗用車やオートバイ同様にメタリックの鮮やかなカラーリングが特徴的であった。機能的には、リクライニング操作が容易にでき、バックサポート（背もたれ）後方のレバーを片手で握るだけで 170 度程度まで下げることが可能である。また日本製の同タイプの車いすは本体重量は 20kg を超えるが、その 1/2 の重さであることも扱いやすい理由の一つである。さらに日本のリクライニング式車いすは、全介助が前提のため、車輪の径も小さくハンドリム（自力走行時に握って操作する部位）は装着されていないタイプが通常であるが、必翔銀髪製はスタンダードタイプ同様のハンドリムが標準装備されている。これにより、両上肢の残存機能を活用できる利用者であれば、短距離の自力による移動が可能となる。家族が操作しやすいもの、ケア

が負担なくできるもの、利用者自身の心身状態や生活に合った商品を迫及し、改良してきた結果、この「PH-185 リクライニング式車椅子」は、2016年度の台湾生活補助具（福祉用具）の優良賞を受賞している。

価格については、日本製同タイプの約1/2～2/3の値段である。リクライニング式車椅子は、メーカーにより仕様が異なるので一概に比較は難しいが、日本の福祉用具カタログ掲載の定価が15万～25万円という価格帯なので、それを基準に考えると、対費用効果の高さは魅力の一つとなる。我々も操作し、試乗を繰り返した結果、日本の学生や施設職員にぜひとも紹介したいと考え、その場で1台輸入する手続きをとった。

このタイプの車椅子の課題として考えられることは、利用者の残存機能をより一層活用するならば、ハンドリ



図 25. リクライニング式車椅子 PH-185



図 26. ハンドリム・リクライニング 100～170°

ムを使って自力走行を可能にするだけでなく、リクライニング機能も利用者自身が調節可能にしなければならない。このタイプの車椅子ユーザーの心身機能・身体構造、健康状態を考慮すると、利用者は限定されるが、自己選択、自己決定の観点から、より自分の意思で使いこなすことが求められる。ハンドリムの操作、ブレーキ（ストッパー）の操作、アームサポートの調整なども含めて、今後学生と共に改良点を検討したい。

もうひとつ注目した福祉用具が歩行補助杖である。日本では、多点杖（4点杖）の品目に該当する。特徴として挙げられる点は、グリップ部と脚先部である。グリップ部は、安定して身体を支えられるように、手掌部がしっかり馴染むデザインになっている。人間工学的に、手の形状に合わせて持ちやすく、滑りにくい配慮がなされている。脚先部は、中心がゴム製で、その周囲に4枚のプラスチック樹脂が十字型の花弁のように開くデザインになっている。4枚の接地部分が2段階に開く構造であり、杖本体と脚先部の付け根が360度回転できるので、坂道、スロープを移動する場合でも、確実に接地でき、



図 27. 歩行補助杖（多点杖）



図 28. 脚先部（プラスチック樹脂製の接地部分）



図 29. 座位保持クッション



図 30. 屋根付き電動カート

傾斜地でも安定した歩行が可能となる。日本製の接地部は合成ゴムなので、摩耗しやすく、ゴムが劣化するたびに交換が必要であるが、プラスチック樹脂製のため長持ちするメリットがある。この杖も、全員で体験した結果輸入することにした。これらの車いすと杖は、生活支援技術の演習で活用している。

必翔銀髪事業株式会社では、車いす、4輪電動車いす、杖以外にも、負担の少ない座位姿勢を保持するためのクッションや全天候型のフロントガラス・屋根付き電動カートも製造販売を手掛けている。いずれも利用者本人、家族ら顧客の声を拾い上げて商品開発・改良につなげている。ちなみに、全天候型の屋根付き電動カートは、日本の法規制上、現時点では輸入販売はできない商品である。

Ⅲ. 最後に

2016年の視察にくらべ、台北の都市部は我々の想像以上に介護環境が整っていたことがわかった。また国の公的機関が提供する高齢者健康予防や活動は活気があり、既存の生活環境を変えずにより便利に自然に活動を取り入れていることにも感銘を受けた。

介護保険が無くても、民間企業の力や住民の力による小さなアイデアから生まれるさまざまな活動は、住民の意欲向上に役立っていることが感じ取れた。高齢化問題や認知症問題は日本も台湾も環境の整備が期待されている。本当にその国に適したサービスとは、どこかの真似をするだけで達成できるというものではない。是非、日本の学生にもこのような近隣諸国の取り組みや努力を見てほしいと願う。これからも各国の情報や現状の把握を行いながら、教育と地域に貢献できるよう、更なる働きかけをしていきたい。

謝辞

この度の視察先において、多くの方々から熱烈的な歓迎と詳細にわたる説明を受けたこと、そしてアジアンワイズ有限会社王珠恵社長にすべての視察先をアレンジしていただいたことに感謝いたします。また視察先を紹介していただいた中山健康促進協会の郭秀珍理事長、祥和国際物流株式会社の王清風總經理にも心より感謝を申し上げます。

【注】

- 1) 台湾で利用される老化率であり、14歳以下の人口に対する65歳以上人口比率。数字が高いほど高齢化社会であると考えられる。
- 2) 三高とは、高血圧、高血糖、高コレステロールを指している。